

仕事面では・・・

十八歳になると、初めて郡方書役助という今で言えば税務署の徴税課のようなところに出仕している。

そもそも西郷は、
はじめ書いたように
“ 純粹 ” “ 正義 ” “ 勇敢 ” “ 謙讓 ” の男なのだが、
特に正義感が強かったと言われている。

彼は、その職場で生来の正義感をいたく刺激される最初の上司に出会った。
迫田太次右衛門利済という郡奉行であった。

迫田は奇人で通っていた。

郡奉行といえば、
税務署の署長のような地位にあるのだが、
自身はみすばらしい家に住み、
仕事一途、外に向けての体裁ということにまったく無頓着であり、
我欲のようなものを他者に感じさせることがなかった。

この奉行、ある時仕事上で表彰され、
藩主より直々に「報酬について望みを申せ」と言われたことがある。

この応えが凄い。
「我が庭の倒れかかっている松の木を支える丸太棒がいただきとうございもす」

可愛げが無いというか・・・
なかなか藩主に向かって言える言葉ではない。

浮き世離れしれおり、普通の人から見ればやはり変わり者ということになるう。

万事がそんな調子の迫田に対して、
西郷がそのストイックさの理由について問うたことがあった。

それに応えて
「おいだとて、金も欲しいし名誉も欲しい、人間じゃからな。」

欲しいが、公の立場にあって自ら正しくありたいと思うが為に耐えているのだ。

耐えるためには、先ず、
果てしがない己の欲念を己自身ではねつけてしまわねばならぬ。
他人が私の言動を奇行呼ばわりするいちいちがそれなのだ。
西郷、欲には切りがないものじゃし、
欲を満たすことも、
又、貧すること同様人の心をさいなむものでござすよ」

これは、西郷自身が思い描いているリーダーのあるべく姿とぴたりと一致した。

若い西郷は、迫田の後ろ姿を見ながら、徴貢の現場で厳しく鍛えられてゆく。